



## 「実りの秋」

(財) 地方公務員等ライフプラン協会 多田 正巳

### 実

りの秋を迎え、農作業のため実家へ行く日が近づいてきた。

実家に行くことは、久しぶりの兄弟弟との再会、収穫の喜びを味わうこと、環境のいいところで適度の運動など良いこと尽くめだ。

私の実家は、農地が約1ヘクタールあり、子どもの頃には米作り、野菜（なす、胡瓜、白菜など）を栽培し、市場への出荷の手伝いをした記憶がある。

父が他界してからもう8年が過ぎ、今は、そのうち田圃の30アールあまりの米を作り、兄弟弟と私の4家族で消費し、残りの農地は、専業農家に貸している。

父は生前、退職後の稼業として農業をするため、祖父から引き継いだ農地を増やし、積極的に米・麦・野菜の栽培に取り組んできた。農業では、農作業の丁寧さや品質の良い農作物の収穫など専業農家からも褒められるほどの出来であった。

病気で農作業ができなくなっても田圃が気になっていたようで、病院の帰りにはいつも車で稲の成長を見に連れて行った。黄金色に実った稲穂を見ると父が満足した様子で微笑んでいたことを思い出す。

その後も父の思いを継ぎ、今でも兄弟弟と私とそれぞれの子どもたちで稲作を続けている。

実家の兄以外は、離れて暮らしているので、5月の連休には、種籾を苗床に蒔く、6月に田植え（父の命日が近いので作業終了後、墓前へ報告）、10月に稲刈り、籾の乾燥、籾すりの手順で行われる。農作業の準備は、ほとんど兄がしてくれるので、10月の収穫時期以外は、半日もあれば作業は終わってしまうが、農作業後、数日間はずっと筋肉痛に悩まされることや兄がよく言う農機具（トラクター、田植機、コンバイン、乾燥機など）の維持管理、種・肥料などの必要経費を考えると米は作るより買ったほうがと云うのがみんなの意見が一致するところである。

父が亡くなって数年後に母の入院もあり、農地を手放そうという意見もあったが、父の代に築いた農地を手放すことは、天国の父に申し訳ないということで断念した。

今思えば、兄弟弟と私の4人の中には、盆や正月が仕事のものもあり、これを機会にいろいろなことを話し合うことは、兄弟弟の意志の疎通を図るうえで意義深い。

今年は特に、4人全員が50歳以上となり、週2回訪問介護のお世話になっている母のこと、それぞれの仕事、健康状態（人間ドックの検診結果など）、子どもたちの就職・結婚などそれぞれのライフプランについて話す内容が盛り沢山となりそうだ。

